①くすの木仏(比曽)

欽明天皇のころ、難波の海辺で、のちに河内国泉北郡茅渟（ちぬ）の海に、一本のふしぎな木がただよっていた。その木は、日輪をあざむくほどに、光りかがやいていたというのである。

天皇は、そのうわさをきかれると、すぐに、溝辺の直（あたい）にいいつけて、それをしらべさせた。

直（あたい）は、海には行ってそれをみると、光っているのはくすの木であることにまちがいはなかったので、その由を天皇に報告した。しかしいずれにしろ、そんな光りかがやく木はめずらしく、天皇は漁師にいいつけてそれを拾い上げ、仏工に命じて二つの仏像をきざませた。

すばらしくりっぱな、光りかがやく仏像ができあたったので、その一体を聖徳太子の開基にかかる比曽の世尊寺に、安置させた。

これがわが国における仏像彫刻の最初の仏であり、しかも常にまばゆいばかりに光りをはなっていたので、それにちなんで世尊寺のことを、現光寺ともよぶようになったということである。

ひそのかんのんさま